

ZOCALO 2018 6 ▶ 7

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

漫画家 浦沢直樹の世界

浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる！ - 埼玉の巻 -
7月7日(土) ~ 9月2日(日)

「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる！ - 埼玉の巻 -」(7月7日 ~ 9月2日)の開催をひかえ、自他ともに認める浦沢直樹ファンの加藤哲之副館長に、浦沢ワールドの魅力聞いてみました！

とうとうきましたね。漫画という芸術文化の世界で常にトップを走ってきた「浦沢直樹」の登場です。

当館の歴史の中でも初めての漫画の展覧会。本当にやるの？との声も少しはありました。しかし、もはやサブカルチャーではない本物の漫画の世界を皆様に分存に楽しんでいただける、素晴らしい機会を得たと思っています。

浦沢は1960年生まれ。デビュー以来、スポーツ、ミステリー、歴史、SFなどそれぞれ違うジャンル(浦沢自身はジャンル分けを嫌っていますが)での大傑作を次から次へ誕生させてきました。時代の予言者ともいべき浦沢の作品からはそれぞれの時代の大きな動きが感じられます。『YAWARA!』から田村亮子が生まれ女子柔道ブームへ、『20世紀少年』では、昭和の香り漂う設定で幅広い世代の漫画ファンを過去から呼び戻しました。そし



『20世紀少年』 © 浦沢直樹・スタジオナッツ 小学館

て手塚治虫への敬愛をこめて正面から挑んだ傑作『PLUTO』では、人間とAIの未来を暗示する重要なテーマが取り上げられています。

また、浦沢作品は、多くのアニメ化、そして『20世紀少年』の映画化大ヒットなど形を変えて多くのファンを拡大してきました。しかし、そこでも他のメディアに流されることなく、あくまで漫画を表現の手段として、その完成度を高めていきました。

浦沢はどんなに多忙でも人物については必ず自身で仕上げるといわれています。もともと女性を描くのが苦手だった浦沢が、「猪熊柔」という漫画界のアイドルを誕生させたことは皮肉な話ですが、逆に男性に関しても美しく描くことにはある種の恥ずかしさがあったと語っています。

数ある人気キャラクターの人物描写に対するこだわりも、この展覧会の見どころのひとつです。キートンとヨハンの男前対決?など、とことん比較してみるのも楽しいと思います。



『MASTERキートン』 © 浦沢直樹・スタジオナッツ / 勝鹿北星 / 長崎尚志 小学館

あえて漫画で描くことにこだわり、これまで積み上げた作品は、なんと150冊3万ページにもおよびます。コマ割りや引きなど、漫画という形式にこだわり、次の展開へと読者の期待感を膨らませるテクニックは秀逸です。ページをめくる手を止められなくなる浦沢漫画の魅力は大いに堪能してください。そして2018年、新作『夢印』で浦沢直樹は次のステージに。常に新境地を切り開き、進化し続ける漫画家浦沢直樹の世界へ、どっぷりと浸かってください。漫画が大好きな人も、そうでない人も。

最後に、「Happy Endかそうでないかは、作者がどこで物語を切りあげるか、それだけの違いだ」(『BILLY BAT』より)・・・
かっこいい。(浦沢先生すみません、敬称省略させていただきます。) (T.K.)



『YAWARA!』 © 浦沢直樹・スタジオナッツ 小学館

さいきんのたまもの①

近年の新収蔵作品を展示・紹介します

美術資料の収集予算を確保できている近年、当館では毎年1点ずつ質の高い作品を取得しています。平成29年度は、県ゆかりの重要な美術家・瑛九の油彩作品《手》を購入しました。エアブラシと型紙を使用して制作された本作品は、これまで当館にはなかった種類のもので、長らく収蔵が待ち望まれていたタイプの作品です。当館が資料として所蔵している瑛九の型紙のなかには、《手》で使用されたものが見つかっています。昨秋に既にお披露目していますが、今年度第4期の瑛九の特集展示で改めて《手》の制作プロセスに肉迫する予定です。



瑛九《手》1957年

次にご紹介するのは、当館での企画展をきっかけにご寄贈いただいた作品たちです。県ゆかりの美術家である清水晃氏、吉野辰海氏については、平成23年度に二人展「清水晃一漆黒の彼方 / 吉野辰海一犬の行方」を開催していますが、出品作品や関連作品のご寄贈いただきました。また平成28年夏に企画展を開催した竹岡雄二氏からは、椅子のかたちをした出品作品《プロトタイプII 背面補強》(裏面を参照)をご寄贈いただきました。「椅子の美術館」として知られる当館に、まさにふさわしい作品です。展覧会活動がコレクションの充実につながっていくことが、こうしたご寄贈を通じてご理解いただけるものと思います。

また画家・寺井力三郎氏からは、寺井家と親交があった彫刻家・木内克によるテラコッタ製のトルソのご寄贈を受けています。木内は、戦後のわが国を代表する彫刻家のひとりですが、これまで当館には収蔵がなかったため大変重要なご寄贈となりました。既に収蔵がある県ゆかりの美術家・出店久夫氏からも、印象的な大型の作品2点と資料をご寄



吉野辰海《水犬》1988年



清水晃《漆黒から》1990年

贈いただいています。

寄託としてお預かりしている作品もご紹介しましょう。戦後の現代美術を代表するドイツ出身の美術家のひとり、ヨーゼフ・ボイスをはじめとする欧米の現代美術家たちによる版画作品7点は、当館では手薄となっている欧米の現代美術のコレクションを補完するものとなっています。近い将来に、

ジョージ・シーガルなどの当館収蔵品と一緒に展示する機会も出てくることでしょう。

瑛九の《手》を除き、上に紹介した作品は、平成30年度 MOMAS コレクション第1期「さいきんのたまもの」で展示しています。西洋の名品を紹介する「セクション：シャガールとかフジタとか」とあわせ、7月8日(日)まで開催していますので、新たに当館のコレクションに仲間入りした作品たちに、是非会いにきてください。(T.S.)